



あんげろす第65号

著者	徐 正敏, 加山 久夫, 渡辺 祐子, 大西 晴樹, 村上志保, 植木 献
雑誌名	あんげろす : 明治学院大学キリスト教研究所ニュースレター
巻	65
発行年	2014-12-10
URL	http://hdl.handle.net/10723/2264

あんげろす

日本大学生の宗教に対する関心

徐正敏

明治学院大学、そして講義に出向く立教大学で、いくつかのクラスに簡単な質問を試みた。みなさんはどんな宗教であれ、信じている宗教がありますか？そして宗教を信じなくとも、宗教について関心はありますか？という質問だ。科目はそれぞれ異なるが、初日の授業に参加した学部の学生たち約100人、約50人、約30人ほどの授業で同じ質問をした。結果は約100人ほどのクラスでは信じている宗教がある学生は0人、宗教について関心があるという学生は7名だった。約50人ほどのクラスでは信じている宗教がある学生は3名、宗教について関心がある学生10名が手を挙げた。予想していたよりも関心度は低い。

これに比べ、2010年に、当時の私の勤務先である韓国の大学で同じ質問をした際は、約100ほどのクラスで信じている宗教がある学生は65名（このなかでクリスチャンは40名）、宗教に関心がある学生は95人だった。単純な比較ではあるが、日韓の大学生の宗教に対する関心度は極端に差があることがわかる。こうした認識の違いは、日韓間の別の争点における表面的な見解の違いよりも、はるかに根本的な問題である。

→次頁に続く



これについて、わたしは学生たちに、ふたつのことがらを前提として考えるよう語りかける。まず、日本の学生の大多数が、自分のアイデンティティーとして「無宗教」を選んでいるが、この「無宗教」も一つの宗教グループで、しかも伝統的宗教に比べて最も歴史が短い新宗教だということ、これが一つ目の前提である。次に、人類の歴史と現在を詳しく見ると、たとえそれが政治、経済、文化、社会を通して表現されたり、あるいはそれらに包まれたりしていても、根幹としての宗教は常に歴史に強烈に作用してきたことである。そしてむしろ宗教は最も高く最も巧みなレベルの「テクノロジー」を通して現存し、すべてのビジネスと組織力の根本、「リーダーシップ」の背景にも作用している。すなわち宗教を手放すと人類の歴史と現存から疎外されるしかないということ、これが二つ目の前提である。

幼いときから大部分の宗教は古ぼけており、または危険なものだという隠然とした教育を受けてきた日本の大学生は、この二つの前提から出発する意味を知ると、多くが真剣になり学修に対し積極的な姿勢を見せるようになる。日本のエリートたちが宗教から目を逸らせば、多くの民衆は「宗教的危機」に陥るかもしれない。ここ最近、幾度にもわたって日本国内外で起きた宗教的事件（たとえば「オウム真理教事件」や最近日本大学生の「ISIS 渡航未遂騒動」など）を例に挙げながら日本エリートの責任をとりあげると、はっとした表情をする学生も見受けられる。こうして彼らは、ようやく自分自身の問題として宗教を考えるようになるのである。

私の宗教講義は何よりも、日本の若者へ宗教に対する関心を目覚めさせるという地点から始めなくてはならないことを痛感している。

そ・じょんみん(教養教育センター客員教授、協力研究員)

第 65 号
2014 年 12 月

「いま、協同組合を考える」

加山 久夫

私は、明治学院に在職中、明学生協のサービスの多大な恩恵を受けました。また家族ぐるみで消費、医療、共済など協同組合との関わりをもっています。しかし、「協同組合とは何か」について、掘り下げて考えるといったことはついぞありませんでした。多少ともそれについて考えるようになったのは、やっと定年退職後になってからです。そして、2005年春の退職後、賀川豊彦記念松沢資料館の仕事を手伝うようになって、賀川豊彦が「わが国協同組合の父」としていまなお記憶されていることも知りました。もっとも、協同組合関係者の間でも、そのことを記憶している人はそう多くないかもしれませんが。

21歳の賀川神学生が神戸スラムで救霊・

救貧の活動を始めてから100年になる2009年、明治学院を含む賀川関係団体や協同組合諸団体がさまざまな記念事業を展開しました。私個人としては、「賀川豊彦と協同組合運動」について話すようにと協同組合関係の集まりにしばしば招かれたりもしました。お蔭で、それまで訪ねたことのない多くの地方都市を訪ねる機会を得、各地の文化的豊かさを改めて知る機会ともなりました。それにしても、いま振り返って見て、長年にわたり協同組合に関わっている方々の前で、よくもまあ厚かましく協同組合について語れたものだなと思っています。わが国には、「協同組合学会」があり、農業経済や協同組合論の専門家は少なからずおられますが、賀川豊彦の協同組合思想や実践について語るとなると、あまり人がいないということもあり、やむを得ずお引き受けした次第です。賀川豊彦記念松沢資料館では、日頃、さまざまな協同組合の職員研修として来館するグループのために賀川の協同組合の思想や実践について話す機会もあります。ということで、この年になってから、賀川協同組合論のみならず、協同組合の歴史や思想などについて、にわか勉強を余儀なくされています。しかし、そのお蔭で、すでに大正時代に、寡占資本主義でも社会主義経済でもない、いわば「第三の道」として、互助経済としての協同組合経済や組織文化の可能性に積極的な関心をもった賀川の経済思想や社会思想を知り、かつそれに今日的共感を覚えます。貧しい人びとに寄り添うセツルメント、労働運動、農民運動など多方面の社会運動の、いわば集大成として、協同組合運動に情熱を傾け、そこに友愛社会実現への途

を見た賀川の先見性を評価したいと思うのです。

F.テンニエスは『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』（杉之原寿一訳、岩波文庫）において、ゲノッセンシャフト（協同組合）について言及し、「それによってゲマインシャフト[共同社会]的な経済原理が、ゲゼルシャフト[利益社会]的生活条件に適合せる形態をとって、著しい発展能力を有する新しい生命を獲得するということが認められる」と述べ、さらに現在にも通じる、次のような発言をしています。「資本主義的・ゲゼルシャフト的世界組織は、みずから招いた恐ろしい混乱を経験せる後も、なお傍若無人にその破壊力を行使している。かかる現象に対して、『ゲマインシャフト』への声が…次第に高く叫ばれて来ている。…生命を獲得するためには、精神は、生命能力したがって発展能力を有する身体と合体しなければならない。かかる原理こそ、ゲノッセンシャフトの自己保存の理念であった。これによってゲノッセンシャフトは、単なる仕事の経営に墮することからまぬかれるのである」。これは100年前の言葉ですが、「資本主義の終焉」すら語られる現在、いままなお有効な言葉であると考えます。最近、千葉大学や聖学院大学などいつかの大学では、協同組合の協力（財政的、人材的）を得て、協同組合についての科目が開講されていますが、本学でも、協同組合の思想や実践について、学生の皆さんが新たな視野をえる機会を提供していただきたいものです。諸先生方や明学生協の組合員・職員の方々にお考えいただけると有り難く思います。

かやま・ひさお（公益財団法人賀川事業団雲
柱社理事長、名誉所員）



賀川豊彦 画 「愛は私の一切である」

中国の教会を訪ねて（2）

渡辺祐子

浙江省における十字架強制撤去

この夏、浙江省各地の教会の十字架が強制撤去されたニュースが日本でも話題になった。教会の象徴である十字架を守るために連日連夜教会の前に座り込んで監視を続け、強制撤去当日、警察権力に無理やり排除され泣きながら賛美歌を歌う教会員の痛ましい姿は、Youtubeでも全世界に配信された。

この問題をNHKのある番組で取り上げた中国の専門家は、浙江省で進行する十字架撤去と「地下教会」に対する「迫害」を無理やり結び付けて説明していたが、この解釈は二重に間違っている。第一に、強制撤去の対象となったのは、政府公認の三自愛国教会のみ

であり、さらにこちらがもっと重要なのだが、現中国に「地下教会」らしい教会、つまり人目を忍んで隠れキリシタンの様に集会を持っている教会は今ではあまり見られないからである。「家庭教会」という現在の一般的な呼称をなぜ使わないのか、何か意図的なものを感じてしまう。どうしても「迫害」という言葉を使いたいのであれば、浙江省当局は、政府公認の教会の十字架を教会の同意なくして無理やり撤去している、これは教会迫害といってもおかしくない、というべきだろう。

それでは、現在中国の家庭教会はどのような状況にあるのだろうか。そのことについて述べる前に、浙江省の十字架撤去問題について私が理解している範囲でもうすこし説明しておきたい。

浙江省の十字架強制撤去は今年の2月末に始まった。2012年に共産党浙江省委員会書記に就任した夏寶龍の「三改一拆」（旧住宅地など三つの地区の違法建築を取り壊す）方針に従った措置とされている。その後杭州、寧波、台州に瞬く間に広がり、8月現在で二百数十もの十字架が教会員たちの反対を強制排除する形で無理やり撤去された。この間4月末には温州永嘉県三江教会の会堂自体が取り壊されるという衝撃的な出来事もあった。当局は当初、同教会が建築基準を満たしていないので、十字架の撤去と違反部分のみの取り壊しを決定していた。しかし教会員が抗議行動を始めると、こんどは会堂全体の取り壊しを決定、強行し、長老を逮捕、信徒を震え上がらせた。

会堂自体の見せしめの取り壊しは、海外からの激しい批判を巻き起こしたため、その後

さすがの当局も、取り壊しの対象を十字架のみに限っているようである。

前回の拙論で述べたように、中国の公認キリスト教会は三自愛国運動委員会と中国キリスト教協議会の二つの会「两会」の指導の下におかれていて、各地に省から市、県レベルの「两会」が設置されている。浙江省内にも行政単位別の两会があるが、違法建築問題解決を大義として始まった十字架強制撤去について、最初の段階では省級の两会は明確に反対の意思を表明していた。しかし間もなく全く逆の姿勢に転じ、「キリスト者は法規を守らなくてはならない」とする見解をウェブサイトに掲載している。一方県市級より現場に近い两会は教会の権利を重んじるべきという姿勢をとっており、教会を管轄する組織も決して一枚岩とは言えないようである。

こうした事態ははたして習近平下で厳しさを増す言論・思想統制と軌を一にしているのだろうか。中央政府から何らかの指示があったのかどうか、私には今それを判断する材料はない。もちろん指示はなくとも、少なくとも中央の是認なくして一地方政府がここまで強硬な措置をとるとは考えにくい。

だがたとえば、香港、台湾で広く読まれている『亜洲週刊』は、浙江省で起きている騒動に中央政府が一枚かんでいるという見方には否定的で、むしろ中央政界進出を狙う夏書記のアピールと見たほうがより自然だという説を引用している。同雑誌によると、地元ではこんなうわさが飛び交っていたそうだ。この書記はある夜温州市内を訪問した際、高速道路の両側に十字架の光り輝く電飾を多数目にし、「ここはキリスト教の天下なのか、共産

党の天下ではないのか？」と憤然として言ったという。もしそれが本当なら、夏は十字架を共産党の支配に挑戦する教会権力の象徴とみなし、それら目障りな十字架を取り除くことによって共産党の政治支配とその頂点に立つ自分の威光を見せつけようとしたと解釈できるかもしれない。

中央の宗教政策との関連は不明としても、その妥当性について確かめようもない基準を、当局が時には恣意的に当てはめ、反対する人々を暴力的に排除し、極端な場合は逮捕してまで強制的に撤去する光景は、中国における宗教、とりわけキリスト教と政治がどのような関係にあるのかを十分すぎるほど見せつけるものだった。

ところでこの強制撤去は、家庭教会には適応されなかった。なぜなら家庭教会は十字架を掲げることがそもそも許されていないからである。

家庭教会から公認教会へ

私は昨夏、武漢のある教会で礼拝を守り始めるまで、うかつにもそのことを全く意識していなかった。私自身は、高校から大学まで十字架のない教会に通い、オランダ滞在中も十字架を掲げていない改革派教会の礼拝に出ていたこともあり、十字架が教会の必須アイテムであるとは思っていないのだが、それがかえって中国教会の理解を乏しくさせていたようである。

武漢に来て間もない日曜日、1867年に武漢で最初に建てられた長江ほとりのプロテスタント教会「崇真堂」(公認教会)で礼拝を守り、その後歩いて20分ぐらいのところにある革

命記念館をぶらぶら見学していると携帯が鳴った。お世話になっている華中師範大学の劉教授（当時）からである。今から大学構内にある骨董品館を見せるからすぐに戻って来いという。館長が特別に開放してくれるからというのだ。ああ、またもや中国式。どうして中国人は前もって言ってくれないのだろう。急すぎる…と言いたいところをぐっと我慢して、急ぎ地下鉄で大学に引き返した。そこでお会いした館長の奥さんの晋さんが大学のすぐ近くの教会の会員で、翌週から私は彼女の誘いでこの教会、武漢洪山福音堂の礼拝に参加することになった。

洪山福音堂に行ってみてまず驚いたのは、会堂がないこと。それまで私が礼拝に参加したことのある教会は、どれも立派な会堂を持つ三自愛国教会だったが、この教会はビルのワンフロアを貸し切って、そこで礼拝その他の活動を行っている。ワンフロアといっても、他の公認教会の会堂よりはるかに狭く、収容できる人数も当然限られている。

もっと驚いたのは、自由で家庭的な雰囲気と開放感だった。部屋の壁には様々な聖画が飾られ、後ろの方には韓国の教会からの手紙や写真が多数貼られている。

そうした開放感は礼拝の雰囲気にも現れていた。青年たちのバンドによる讃美歌演奏が始まり、それに合わせてみんなも讃美歌を口ずさんだり、手拍子をとったり。しばらくしてから牧師が講壇に立ち礼拝が始まる。聖句や讃美歌はすべて正面のスクリーンにパソコン投影される。説教は、中国の他の教会と同じように講解説教ではなくテーマ説教だが、割とオーソドックスで、基本的な教理もしっ

かり押さえられ、力強くわかりやすい。その後初来会者を前に呼び、皆で「私たちは一つの家族」という賛美歌を歌いながら（この讃美歌は非常に乗りがよく、今でもよく覚えている）、牧師が一人一人に十字架のペンダントを渡す。私ももちろんありがたく頂戴した。

礼拝後は、青年会、壮年会など複数の教会内団体が当番を決めて毎週昼食を提供し、小グループを作って世間話に楽しく花を咲かせながら一緒にご飯を食べて解散となる。時には礼拝を完全スキップし、食事を食べるためだけにやってくるような人もいた。さすが中国人はおおらかだ。

それにしても、と私は思わずにいられなかった。本当に公認教会なのか？この明るさ、熱心さ、何より後ろに飾ってある韓国教会からの手紙類。もしかすると誘われるままに家庭教会の礼拝に来ているのでは？

私のこの勘は中らずといえども遠からずであった。この教会は私が初めて訪れるわずかひと月前に、家庭教会から公認教会に登録したばかりだったのだ。だから家庭教会のまさに家庭的な雰囲気がそのまま残っていたのである。牧師の白先生は中国瀋陽出身の朝鮮族である。韓国教会との交わりが続いているのはそのためだった。

だがなぜ家庭教会から政府公認の教会になろうとしたのだろうか。何か当局からの圧力があつたのだろうか。無遠慮な私は二度目の礼拝時に、聞いてはいけない質問と聞いても構わない質問を自分なりに区別しながら、恐る恐る牧師に尋ねてみた。すると白先生は苦笑いを浮かべて明らかに答えにくそうな表情をされたので、慌てて質問を取り消した。や

はり外国人にはいいにくいことのようにある。ところが私を教会に誘ってくれた晋さんはずっとあっけらかんとしていて、「十字架が掲げられて、大っぴらに伝道できるからよ」と説明してくれた。「これまでは決してこそこそ礼拝をしていたわけではないけれど、ここに教会があることは口コミで広げるしかなかった。でも登録されてからは、看板を出すこともできるし、十字架を掲げることもできる。いま業者に十字架を作ってもらっているところなの。2週間ぐらいしたらビルのでっぺんに十字架が立つのよ。」

また大学の研究休暇を武漢のとある理系大学で過ごし、日曜日にはこの教会に来ている台湾の先生はこう言っていた。「登録することで自由がなくなるという心配はもちろんあるだろう。しかし、ここに教会があることを堂々と地域の人たちに伝えることができる。なによりも教会が安定的に運営できるメリットは非常に大きい。」

いまから75年前、南京を陥落させた日本軍は武漢に侵攻し、ここでも多くの市民を虐殺し占領地とした。そのかつての加害国からひょっこりやってきた日本人を温かく迎え入れてくれた洪山福音堂の皆さん。彼らのおおらかな笑顔からはなかなか想像できないが、公認の道を選び取るか否かは彼らにとって苦渋の選択だったに違いない。どちらの道を選択するにしても、中国政府の宗教政策という高い壁に囲まれている現実を変えることは、当面まず不可能だからである。

ある日の礼拝で献金の当番だった女性が捧げた祈りが忘れられない。「神様、中国には、家庭教会と登記教会という二つの教会があり

ます。けれどもどちらもイエスキリストにあって兄弟です。どうかこの二つの教会のどちらにも同じように豊かな祝福を与えてくださいますように。」そう、彼らは現実に悩みながらも見えない教会を信じている。その確信に満ちた信仰にこそ希望がある、そう思わされるような感動的な祈りだった。

晋さんの予告より1週間遅れて、洪山福音堂のあるマンションの屋上に十字架が設置された。少しモダンな線の細い十字架で、晋さんは「目立たない」と不満げだった。でもこれ見よがしの派手で大きなビルが林立する中国都市の風景にうんざりしている私には、これぐらい控えめな十字架はむしろ好ましく思えた。第一あまり目立ちすぎると、強制撤去の対象にされるかもしれないではないか。

(続く)

(わたなべ・ゆうこ 教養教育センター教授、所長)



ロンドン伝道協会宣教師グリフィス・ジョンの尽力で、武漢で最初に建てられたプロテスタント教会
撮影渡辺

NHK のラジオ講座を担当して

大西晴樹

9 月末から NHK ラジオ第 2 放送のカルチャーラジオ「歴史再発見」という番組で、「ヘボンさんと日本の開化」という講座を担当することになったことは、いつでしたか本誌の巻頭言で触れたとおりです。番組は現在、毎週火曜日午後 8 時半から 30 分間（再放送は翌週火曜日の午前 10 時から）という時間帯で放送されており、12 月 30 日の最終回（第 13 回目）の再放送でもって終了します。

日本近代史を扱う場合、キリスト教、あるいはキリスト者は格好のテーマであり、最近の NHK テレビでは、昨年の大河の時代劇番組「八重の桜」において、同志社の創立者新島襄の婦人となった新島八重、今年上半期の朝の連続テレビ小説では、「花子とアン」で、童話翻訳家村岡花子を取り上げられ、話題になったことはいまでもありません。今回のヘボンは、ラジオのデレクターの方が、本学の創立 150 周年の電車広告を見ているうちにどうしても取り上げたくなったとの理由から、私に白羽の矢が立てられました。ヘボン式ローマ字で知られるヘボンですが、その近代日本に対する歴史的貢献の割には、テレビやラジオで紹介されることがなかったのではないのでしょうか。確かに公共放送である NHK は、特にテレビにおいて、これまで、外国人や宗教者をあまり取り上げてこなかったように思われます。

さて、お話をいただいたのは 4 月半ばのことでした。そして、9 月末の放送開始までに

テキストの全国配布に備えたいので、7 月半ばまでに 8 万字ほどの原稿を書き終えてくれというではありませんか。それも全国の老若男女・各界各層の広範な視聴者に分かるようにできるだけ易しく書いてくれとのこと。私は、5 月の連休明けに韓国の大学で博士論文の審査委員の仕事を抱えていましたので、それを終えてから、1 週間に放送 2 回分の割合で筆を進め、約 6 週間で一気に書き終えることができました。振り返ると、春学期の授業とその準備を抱えながらですので、長い間の行政職で縛られていた時間から自由になったという解放感がなかったら、とても出来るような作業ではありませんでした。

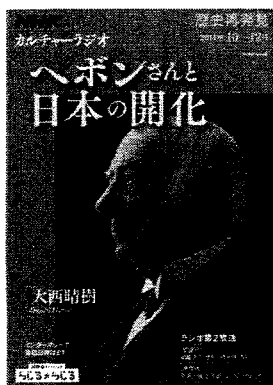
学長・学院長時代の 6 年間に創立者ヘボンの話を学生・生徒・保証人・卒業生に対してしてきましたので、いくつか断片的なトピックは押さえていましたし、第 1 次資料である翻訳された書簡には眼を通していました。しかし、それらを繋ぎ合わせると、それなりのストーリーを組み立てることはできますが、学問的で一貫したヘボン像を構築することにはなりません。幸いなことに、17 世紀イギリスのピューリタン研究者として、マックス・ヴェーバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」を読んできて、ヴェーバー・テーゼは果たしてヘボンに適用されるのか、という点に近年関心を持っており、その点から、ヘボン像をまとめる作業を進めていましたので、なんとか読み物として、批判に耐える書物にまとめることができました。

それにしても、執筆の傍ら、面白い読み物にしようと、手当たり次第に入手できる伝記や先行研究を追いかけましたが、これらの第

2次資料のなかには、果たして第1次資料のどこにそんなことが書いているのだろうかと思いをかきげたくなるような叙述がいくつもありません。それと、今回分かったことは、ヘボンのような人物について記す場合、その人物が偉大であればあるほど、師弟関係やキリスト教信仰といったそれぞれの著者の思い入れ（「認識の曇り」）が必ず入るので、「価値的自由」といわれる学問的禁欲がとくに必要だということです。

手前味噌ではありませんが、本研究所の『紀要』に掲載された一連のヘボン関係の論文や資料紹介は、第1次資料に基づいており、研究の厳格さ、正確さが担保されている点では、いずれも、参考に値するものでした。その意味では、本研究所は大学附属研究所の要件を備えているといえますし、別言すれば、本研究所以外に、ヘボンを客観的に研究する機関はないとも言えます。改めて、本研究所の存在意義を認識させられた次第です。

おおにし・はるき（経済学部教授、所員）



NHK カルチャーラジオ 歴史再発見 ヘボンさんと日本の開化（NHK シリーズ）、NHK 出版、2014。

中国におけるプロテスタントを研究対象として

村上 志保

今年度より協力研究員として在籍させていただいております村上志保と申します。専門は社会人類学で、上海を中心にプロテスタント教会の調査・研究を行っております。

今年 2014 年は、現代中国の宗教状況を調査対象とする私にとって気になる状況が続いております。皆さまもご存じと思いますが、今年 4 月末から中国の温州市を中心に浙江省人民政府による教会堂の十字架の強制撤去が続いております。信者たちは当然ながら強制撤去に対して時にはけが人も出るような抵抗を示していますが、ネット上の情報の一つによると、これまで 300 箇所教会堂において強制撤去が行われたようです。

温州市は「中国のエルサレム」とも呼ばれ人口の 15% がキリスト教徒であります。温州市の企業家にはプロテスタント信者が多く、温州市の経済発展における彼らの貢献が非常に大きいため、市政府でもキリスト教に対して好意的な幹部が多いと言われます（繁栄する温州プロテスタントについては、Gao Nanlai 氏による *Constructing China's Jerusalem*. という本が参考になります。）

その温州市を中心に起きた、危険建造物に対する取り締まりという形での十字架撤去の強行は、これまで中国キリスト教を研究してきた多くの研究者たちにとっても予想外だったのではないかと思います。なぜなら、これまで党政府は、宗教に対して制限的な政策をとりつつも、徹底した弾圧をすることは信者

たちの不満を爆発させることにもつながるために、宗教関連法規の実際の実行においては各地方の状況に合わせてグレーゾーンを許容しつつ柔軟な対応をしてきていたためです。胡錦涛政権にいたるまで、宗教に対してある程度慎重かつデリケートな行政を行ってきた姿勢から鑑みれば、十字架という信仰のシンボルそのものの撤去という今回の状況はかなり突出した状況とも言え、決して小さくはない変化が起きていると言えるでしょう。この出来事についてはいずれきちんとまとめて論じることができればと思います。

私自身はクリスチャンではありません。そのような私が中国のキリスト教に関心を持ったのはほぼ偶然によるものです。もともとは中国に関心があり、高校生までの私は中国政治について学びたいと漠然と考えておりました。その後当時設立されたばかりの東京女子大学現代文化学部地域文化学科に進学し、そこで初めてキリスト教と出会い、中国と共にキリスト教にも関心を抱くようになりました。当時学長でいらした隅谷三喜男先生から、ありがたくも直接励ましの言葉をいただいたことも後押しとなり、最終的に中国とキリスト教という二つの関心が共に研究対象としてつながっていったという次第です。

その後大学院に進学し、共産党政権以降のプロテスタントについての研究を本格的に始めましたが、宗教というものが中国では政治的に敏感な問題でもあることを自覚するようになります。1998年から断続的に行ってきた上海での現地調査では、自分とはかく、自分の研究に関わったことで現地の方たちを万が一でもトラブルに巻き込むことがあっては

ならないと、文字通り石橋をたたきながら調査をすすめてまいりました。しかし調査を進めるにつれて、共産党政権下でのキリスト教会について書かれた論文を読むことで持っていた、教会が抑圧されているというイメージとは異なる、活発さや自由さもまた同時に見えてきたのです。

中国キリスト教を研究していますと申し上げると、「中国では宗教が迫害されているそうですね。」と聞かれることも少なくはありません。中国の宗教状況における政治の影響が大きいことは確かです。しかし「迫害」という一言で片づけるには状況は多面的で複雑であり、また現代において宗教に影響を与えている要素は政治以外にも多様であるということも正確に伝えたいと考えております。今回のような十字架強制撤去という極端とも言える状況に対しても慎重に見てゆく必要があり、ある意味「迫害」とも見える状況の背景に何があるのかをしっかりと見極める必要があると言えるのです。

むらかみ・しほ（協力研究員）



上海市にある国際礼拝堂でクリスマスの時期に撮影
撮影村上

先日久しぶりに『心に刻む』を読んだ。最初に読んだのは確か着任後すぐだったと思う。その時は4 学長声明や学院の戦責告白など印象深かった出来事を思い出す懐古的な読み方だったと記憶している。

けれども先日読んだ際にはやけに生々しく、そしてこの薄いブックレットが少し重くなったように感じた。すでに過ぎ去ったと思っていたものが再来しているからである。

すでに報道によりご存じの方も多いと思うが今年の5 月頃から、「従軍慰安婦」の記事を書いた元朝日新聞記者が非常勤講師をする北海道の北星学園大学に対し、執拗な攻撃が行われてきた。脅迫は大学のみならず同講師やその家族にまで及ぶ。恥ずかしながら9 月末まで私は元朝日新聞記者を標的としたそのような脅迫が日本各地で起きていることを知らなかった。

キリスト教研究所、国際平和研究所の所員が中心となり、有志のメンバーがこの問題に毅然と対応しようとする北星学園大学を支援する会を立ち上げたのが10 月10 日。「人ごとではない」との思いから私も会に加えていただいた。

戦時下、同志社大学への排撃運動を行った草の根右翼は「『学問の独立』なる誤れる思想」を糾弾し、「国体と相反せるマルキシズムの研究と実践」を行う同大が「地上より払拭さるべき存在となつた」と主張した(『特高資料による戦時下のキリスト教運動 I』56-57 頁)。国体を傷つける「従軍慰安婦」への攻撃はかつての言葉遣いをコピペのように繰り返

している。

一方同時代の明治学院は宮城遙拝、靖国神社参拝などに積極的に取り組んだ結果、「格別圧迫妨害等の実例」はなかった(『同 II』337 頁)。自発的に国体との調和を図り、周囲にもその影響力を広めていったからである。そのことの自己検証として『心に刻む』は発行されたはずだ。

言論・学問の自由が脅かされる出来事が続くときだからこそ、その自由が何のために与えられているか歴史を振り返りながら考えていきたい。

(うえき・けん 教養教育センター准教授、主任)



『心に刻む 敗戦50年・明治学院の自己検証』明治学院敗戦50周年事業委員会編、学校法人明治学院、1995。

研究所活動（8月から12月）

所員会議

第5回

開催日時：2014年10月22日（水）14：00-

開催場所：白金校舎本館キリスト教研究所

第6回

開催日時：2014年11月26日（水）14：00-

開催場所：白金校舎本館キリスト教研究所

中華圏プロテスタント研究会

開催日時：2014年9月6日（土）14：00-

開催場所：白金校舎本館キリスト教研究所

主催：中華圏プロテスタント研究会

共催：明治学院大学キリスト教研究所東アジア

戦後キリスト教史研究プロジェクト

戦後の宣教師研究会

研究会

開催日時：2014年9月25日（木）13：00-

開催場所：白金校舎本館キリスト教研究所

明治学院と東アジア研究プロジェクト

公開研究会

「慰安婦問題と中国の民主化—二つの問題はどのようにかかわっているのか—」

講師：班忠義（ドキュメンタリー作家）

開催日時：2014年11月29日（土）13：00-

開催場所：白金校舎本館1252教室

主催：明治学院大学キリスト教研究所明治学院と東アジア研究プロジェクト

後援：明治学院大学国際平和研究所

第35回 賀川豊彦記念講演会

「経済活動は人間の営み～我欲の論理を超えて～」

講師：浜矩子（同志社大学大学院ビジネス研究科教授）

開催日時：2014年11月29日（土）15：00-

開催場所：白金校舎2号館2401教室

主催：賀川豊彦記念講座委員会、賀川豊彦学会

後援：明治学院大学キリスト教研究所、賀川豊彦記念松沢資料館

崔善愛ピアノコンサート&トーク

「『音楽は思想』～花束の中に隠された大砲～」

開催日時：2014年12月16日（火）16：50

開催場所：白金校舎アートホール

司会：渡辺祐子（教養教育センター教授、キリスト教研究所所長）

ピアノ：崔善愛（ピアニスト）

主催：明治学院大学キリスト教研究所

後援：明治学院大学教養教育センター附属研究所、明治学院大学国際平和研究所

新着図書（8月から12月）

- ・『福音と世界』No. 9、新教出版社、2014。
- ・『福音と世界』No. 10、新教出版社、2014。
- ・『福音と世界』No. 11、新教出版社、2014。
- ・『福音と世界』No. 12、新教出版社、2014。
- ・『シヨパン 花束の中に隠された大砲』、崔善愛著、岩波書店、2010。
- ・『行動する預言者 崔昌華 — ある在日韓国人牧師の生涯』、田中伸尚著、岩波書店、2014。

- ・『父とショパン』、崔善愛著、影書房、2008。
- ・『フラナリー・オコナーとの和やかな日々ー
オーラル・ヒストリーー』田中浩司訳、株式
会社新評論、2014年。(田中先生寄贈)

あんげろす ΑΓΓΕΛΟΣ

とは、「メッセンジャー」・「天使」の意。

あんげろす 第65号

2014年12月10日 発行
明治学院大学キリスト教研究所
〒108-8636 東京都港区白金台 1-2-37
TEL:03-5421-5210/FAX:03-5421-5214
Email:kiriken@chr.meijigakuin.ac.jp

題字：澁谷 浩